



Title	メタフュシカ 第29号 彙報/編集後記/奥付
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 1998, 29, p. 141-142
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学文文学部は一九九八年度より大学院重点化に向けての改組を開始し、それとともに文学部人文学科哲学講座は大学院文学研究科哲学講座として編成換えされました。一九九五年の人文科学科設置（十一講座二十専攻）によりて旧哲学科（哲学哲学史講座、倫理学講座、中国哲学講座、インド哲学講座）は哲学講座（哲学・思想文化学専修、倫理学専修、中国哲学専修、インド哲学専修）として統合されましたが、先の大院重点化にともない一九九八年度より大学院文学研究科の文化形態論専攻・哲学講座（哲学哲学史、現代思想文化学、臨床哲学、中国哲学、インド学・仏教学の五専門分野）に再編成されたわけです。

こうした改組とともに新しく設置しなおされた哲学講座では、今後、哲学哲学史、現代思想文化学、臨床哲学の三専門分野が共同で本誌「メタフェンシカ」を継続して刊行してゆくことになります。その三専門分野の研究・教育内容について、次に紹介いたします。

● 哲学哲学史

専門分野「哲学哲学史」は、哲学と哲学史とは不可分であるとの考え方から、開設以来、両研究を一体化してきた。そして、とくにフランスとドイツを中心とする西洋の近世から現代にいたる哲学を文献学的、歴史的に研究し、かつそれを基にして哲学の諸問題を追究している。さらに、こうした伝統を踏まえつて近年は、西田哲学などの日本の哲学、英米系の分析哲学やプログラマティズムをもレパートリーに加え、また、古来からの認識論や存在論のほかに、精神科学方法論、言語哲学、コミュニケーション論などの今日的テーマにも取り組んでいる。なお本年度は、博士前期課程（修士課程）に七名、同後期課程に八名が在籍しており、里見軍之、山形頼洋、入江幸男、吉永和加の各教官が、専門分野・文化基礎学や現代思想文化学所属の各教官と連携しつつ、教育・研究指導にあたっている。

研究室において現在おこなわれている研究・教育活動として、ヘーゲル、ニーチェと生の哲学、ギエルケゴールの実存哲学（浅野教授）、ハイデガー、解釈学、環境思想（講師教授）、デカルト、マルブランシュからメーヌ・ド・ビランへ至るフランス哲学史（望月助教授）など、哲学交流史、人工物哲学（伊東助手）の研究がなされ、講じられている。また今後、教官および院生の研究成果を公表する場として、ニューズレター「現代思想文化学」（仮称）の創刊、さらにインターネット上にホームページの開設を予定している。

● 臨床哲学

旧哲学講座・倫理学専攻は、本年度の大学院重点化とともに、大学院文学研究科においては「専門分野・臨床哲学」に、文学部においては「倫理学専修」に名称変更された。専門分野・臨床哲学は、哲学・倫理学的な思考をベースに、同時代のさまざまな社会的問題が発生しているその現場に臨んで、そこから問題の析出やその表現をその現場のひとびととともに試みるもので、哲学の「臨床的転回」とでもいすべきものをめざし、三年間の準備期間をもつて開設された。これと並行して、従来の倫理思想史や、先端の現代倫理学の研究も活発に取り組まれている。大学院入試では社会人特別選抜枠も設け、初年度は看護・教育関係の三名の合格者があつた。本年度は、博士前期課程に七名、同後期課程に九名が在籍しており、鷲田清一・中岡成文・本間直樹の各教官が研究指導にあたっている。

● 現代思想文化学

専門分野「現代思想文化学」は、本年度より従来の哲学哲学史専攻から分かれて新しく開設された。欧米の近現代哲学研究を基礎としながら、いまや対応が焦眉の課題になつている社会的・文化的諸問題へも哲学的視点から積極的にアプローチすることをめざす。具体的には、デカルトから現代にいたるフランス哲学、ドイツ観念論、生の哲学、実存哲学、存在論、解釈学および現象学等を幅広く研究対象とし、そつした研究を基礎に、生命、環境、科学、技術さらには宗教等の抱える現代的諸問題の考究をも射程に入れる。現在、本年度入・進学生が博士前期課程一年次に三名、同後期課程一年次に四名所属しており、浅野達一、溝口宏平、望月太郎、伊東道生の各教官が、哲学哲学史所属の各教官と連携のもと、教育・研究指導にあたっている。博士後期課程では、他大学のドイツ人および日本人教官も社会人院生として学んでいる。

研究室において現在おこなわれている研究・教育活動として、ヘーゲル、ニーチェと生の哲学、ギエルケゴールの実存哲学（浅野教授）、ハイデガー、解釈学、環境思想（講師教授）、デカルト、マルブランシュからメーヌ・ド・ビランへ至るフランス哲学史（望月助教授）など、哲学交流史、人工物哲学（伊東助手）の研究がなされ、講じられている。また今後、教官および院生の研究成果を公表する場として、ニューズレター「現代思想文化学」（仮称）の創刊、さらにインターネット上にホームページの開設を予定している。

「ニューズレター」は、本年度より臨床哲学論考集『臨床哲学』として衣替えされる。代わりに、十二月に「臨床の知のネットワークのために」という副題をもつ「ニューズレター」「臨床哲学のメチエ」が、院生・学生諸君を中心によりかろやかなフットワークをめざして創刊された。また、月一回、公開で臨床哲学研究会を開催している。本専門分野の研究ならびに社会活動についてはホームページ(<http://bun70.let.osaka-u.ac.jp/>)でも読むことができる。

各教官とも臨床哲学のプロジェクトに全力をあげて取り組むとともに、個人的には、鷲田教授は現在、現象学（フッサーとメルロー・ポンティ）研究、所有論、身体論、他者論、ホスピタリティ論、中岡教授はヘーゲル研究、日本近現代哲学思想史研究、コミュニケーション論、ケア論に、本間助手は現象学研究ならびにシステム論、家族療法研究に取り組んでいる。

「ニューズレター」は、本年度より臨床哲学論考集『臨床哲学』として衣替えされる。代わりに、十二月に「臨床の知のネットワークのために」という副題をもつ「ニューズレター」「臨床哲学のメチエ」が、院生・学生諸君を中心によりかろやかなフットワークをめざして創刊された。また、月一回、公開で臨床哲学研究会を開催している。本専門分野の研究ならびに社会活動についてはホームページ(<http://bun70.let.osaka-u.ac.jp/>)でも読むことができる。

各教官とも臨床哲学のプロジェクトに全力をあげて取り組むとともに、個人的には、鷲田教授は現在、現象学（フッサーとメルロー・ポンティ）研究、所有論、身体論、他者論、ホスピタリティ論、中岡教授はヘーゲル研究、日本近現代哲学思想史研究、コミュニケーション論、ケア論に、本間助手は現象学研究ならびにシステム論、家族療法研究に取り組んでいる。

最後に、哲学講座のスタッフの異動についてご報告申し上げます。本講座臨床哲学研究室（旧倫理学研究室）の霜田助手が平成十年四月より熊本学園大学経済学部助教授に転出、また本学大学院旧倫理学研究室出身の柘植尚則氏（学術振興会研究員）が北海学園大学経済学部専任講師に着任されました。両氏のますますのご活躍を祈念いたします。また霜田助手の後任として、同年五月、本間直樹氏が着任しました。また左記の方々が、本年度本学文学博士の学位を取得なさいました。

（旧哲学史講座元助手、現在、関西学院大学文学部専任講師）

題目「デカルト哲学と第一原理」

阪本恭子氏（臨床哲学博士課程三年）

題目「ニーチェにおける『子供』の生成」

（鷲田記）

【編集後記】

『メタフュシカ』第二十九号（通算）をお届けいたします。前号にも記載いたしましたように、本誌は從来、哲学哲学史講座より刊行されていた「カルテシアーナ」と「カントニア」の二誌を受け継ぎ、旧哲学哲学史研究室と旧倫理学研究室（現、哲学哲学史・現代思想文化学・臨床哲学の三専門分野）の統合研究誌として生まれ変わったもので、本号がリニューアル後の第三号目になります。

溝口教授の巻頭論文と本間助手の巻末論文をのぞいて、他の論文はすべて、現在大学院生に所属している若手研究者による意欲的な論考です。忌憚のないご意見、ご批判をお寄せいただければ有り難く存じます。

一九九八年一二月

『メタフュシカ』第二十九号編集委員

里 見 軍 之

（広域文化形態論講座・哲学講座教授）

鷲田 清一（哲学講座教授）

望月 太郎（哲学講座助教授）

本間直樹（哲学講座助手）

編集補佐

メタフュシカ 第二十九号

（旧哲学史講座元助手、現在、関西学院大学文学部専任講師）

題目「デカルト哲学と第一原理」

阪本恭子氏（臨床哲学博士課程三年）

題目「ニーチェにおける『子供』の生成」

（鷲田記）

平成十年一二月二〇日 印刷
平成十年一二月二十五日 発行 非売品

発行者兼
編集者
大阪大学大学院文学研究科哲学講座

〒560-0043 豊中市待兼山町一五

印刷所 株式会社 天理時報社
〒563-0003 天理市稻葉町八〇番地